

『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本』〈写真版〉

―出版に寄せて―

現代に蘇る『法華經』の精神

池田大作

釈尊生誕の国・ネパール王国。

私が「人類の精神の故郷」を初めて訪問したのは三年前の一九九五年十一月のことである。その折、ビレンドラ・ビール・ビクラム・シャハ・デーヴ国王陛下を表敬し、友好の語らいをもった。また、国立トリブバン大学で栄誉ある「名誉文学博士号」を受け、「人間主義の最高峰を仰ぎて――現代に生きる釈尊」と題して記念講演

をさせていただいた。その時、真心から歓迎して下さった人々の美しき微笑が、今も私の脳裏に刻まれている。

古来、ヒマラヤの麓に「太陽の裔^{すえ}」を名乗る勇敢なるシャカ族の人々が住んでいたと伝典（「スッタニパータ」）は語る。太陽の国――私どもが信奉する日蓮大聖人の仏法との不思議なる縁^{えんじ}を想う。

一九九二年の十一月、東京でトリブバン大学元副総長

のスーリヤ・B・シャキヤ氏と“人類の教師・釈尊”や『法華經』について語り合った。同氏は、『法華經』に説かれる「虚空会こくうえの儀式」について、「仏の偉大な境地の象徴であり、その『現在』のうちに、『過去の十方世界』も『未来の十方世界』も含んでいる。時空を超越しているのが『仏界』である」と、深意を洞察されていた。

日蓮大聖人は、虚空会の意義を、「三世の説法の儀式なり」と説かれ、そして、その会座えざに涌出する地涌じゆの菩薩について「地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり……日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」と仰せである。五濁ごじよく悪世において、尊厳なる「仏の境地」を顕現するには、不正と闘う勇敢なる“精神闘争”が要請されるであろう。

私の恩師である戸田城聖創価学会第二代会長は、第二次世界大戦中、軍国主義に傾く国家権力により、不当にも投獄されたが、獄中で全生命をかけて『法華經』を読まれた。

“仏とは生命である。宇宙生命の一実体である”と悟達され、「虚空会の儀式」に地涌の菩薩として参列して

いる自己自身の姿を覚知されたのである。莊嚴にして、鮮明な、「久遠くおんの儀式」の体得を経て、出獄後、全民衆の生命変革の“鍵”として掲げられたのが、『法華經』の真髓である。「全人類の人格を最高の価値にまで引き上げていこう」と語られていた。

会談の折、シャキヤ氏からは、ネパール国立公文書館所蔵の『法華經貝葉本』(No. 3-678)の貴重な複製を贈呈していただいた。同公文書館のほう大な資料に加え、ネパールでは、ごく普通の家庭に二百―三百年ほど前の写本が保存されていると聞く。まさに中世以来の經典写本類の宝庫であり、仏教文献遺産、原典の研究に欠かすことのできない貴重な存在である。ここに心からの敬意を表したい。

さて、この度の『法華經写本ネパール本』(No. 421)の発刊は、時を超えて釈尊の精神を現代に蘇生させる作業であり、人類の精神的遺産として、また今後の原典研究の貴重な資料として、来るべき二十一世紀の光源となりゆくものと強く確信している。本出版に対して絶大なるご支援を賜ったネパール王国文化省、並びに国立公文

書館の皆様にも満腔の感謝の意を表したい。

一九九八年八月二十四日

(いけだ だいさく／創価学会名誉会長・

創価学会インタナショナル会長)

(本稿は一九九八年十一月十八日に出版された『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本』〈写真版〉の「巻頭の辞」を転載したものです。)